

---

# 無限暴走航路

0シュウト0

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無限暴走航路

### 【Nコード】

N2763Z

### 【作者名】

0シユウト0

### 【あらすじ】

ユーリが出てこない無限航路の小説

主人公が転生系です。故にパロディ、ご都合大量

## 始章 ロウズ編

惑星ロウズ…

夜、空に浮かぶポイドゲート。僕はそれを見上げていた。

いつか、大銀河を渡るOGドッグになる事を夢見て…

始章・ロウズ編

ロウズ周辺宙域

「ちっ…早打ち男は嫌われるよ！」

一隻の輸送船を改造した艦、デイジーリップを操る女性が叫ぶ

それを追うように三隻の警備船、レベツカ級が追いかけてレーザーを撃つ。

そのうち一発が翼のように広がった部分に被弾する

「ッ…やべええええ！」

爆発し、その余波でロウズへと落下していく。

「…え」

その落下していく先には…銀髪の少年がいた。

## 二章 ロウズ準備編

…少年の目の前には巨大な船が落ちている。

轟音と共に落下してきたそれは少年の脇を通過してその巨体を地に落としていた。

「いたたた…」

船から這い出てくる女性

それに少年は駆け寄った…が、少年は倒れてしまった。

「え！ちよつとアンタ！」

女性はその少年を抱き起こす。

そしてショートする船内へと運んでいったのだった

少年 side

「知らない天井だ…」

目

覚

める俺

いやぶざけてる場合じゃないな。

無限航路やっていたら突然画面が光り輝いて、気がついたらベッドの上だった。

つかめっちゃ暗いのはなんでなん？

「気がついたかい？」

声のほうを見るとトスカさんがいた。…ここは叫ぶか

「打ち上げさん!？」

「いや、微妙に違う…いや合ってるのか？」

俺の一言で首を傾げる

つかアレか？ゲームの中に放り込まれたとかか？

デジモンワールド的なの!？」

…もつこのネタわかるのいないか…

side out

???side

「エラー!エラー!」

「カンソクシャニイジヨウアリ」

「コチラカラノカイニユウケツケズ」

「ウワガキモフカ」

「イレギュラー！イレギュラー！」

「ツイセキシヤトウニユウフカノウ」

side out 少年 side

さて、どっか騒がしいみたいだが…

まあ状況をまとめるとだ。

「確かに飛ぶだけはいけるねえ」

「大気圏離脱したらトトラスに向かいますよ。」

航行に支障が出ない部分からパーツ集めて船を直した。

被弾したところはバラし、気密を保つため穴をふさぎ、デイジーリ  
ップは推進装置とブリッジのみの形になった。

トスカさんは渋っていたが、ロウズで一生過ごす気ですかと聞いた  
ら渋々了承してくれた。

てかまさか修理出来るとは驚いた。

頭の中にあつたユーリの記憶まじばねえ「さあて…いこうか！」

次の瞬間…意識を失った。

ま…た…か…よ…

side out

side in

「子坊。起きなよ」  
身体が揺れ、意識が戻る。  
するとどうだろう。

目の前に『売却済み』とかかれた。デイジーリップがあるではないか。

…確かデイジーリップってエキストラモードでOGだったけ…

…そして気づくとトスカさんに肩に担がれていた。

「ちったあ輸送船を買う足しにはなるだろうさ。設計図買わないとねえ」

寂しそうにトスカさんは笑う。

…そして俺は

将来来るであろう。トスカ必死イベント回避を予期して内心ガッツポーズしていた。

んでトトラスの設計図屋

絶望するトスカを横目に二つの設計図を手にする俺

なんで絶望してるかというと、デイジーリップは解体費と売却費が同額だったからだ。



なんでも船を売却する場合、  
売却費 - 解体費という数式が出るらしい。

本来はデিজリーリップはマイナス値になるところだったが、ドロイドのお情けで0になったのだ。

ちなみに俺は自前の200000Gでお買い物である。  
周回プレイのままらしく、高額を所有していた

「夜も末だねえ」

といいつつカップ酒を飲む

…手持ちないのかと聞いたら宵越しの金はもたねえ！とか言われた。  
カップ酒代は俺が出しました。さて、入手した設計図はアルク級と  
ジュノー級である。

性能的には大差はない。大マゼランと比べれば微々たるものである。  
ただしジュノー級のほうが貨物室一個分くらい配置しやすい。  
ただし戦闘艦としてはアルク級が若干高いのである。

とりあえずアルク級を作るかな。

俺はトスカさんを残して軌道エレベーターに乗った  
んで飛んで次の日

「しっかしよくまあこんな人材を集めたねえ。一通りいるじゃないか。」

「トトラスだけで半分ですがね。ロウズ以外の惑星なら集めるのはなんとかありました。」

総人数150人を雇うことに成功した。

ロウズ宙域では宇宙に出れる人は決まっているため、数を集める事はできたのだ。

「しかもあんな大金持ってたなんてねえ、子坊を侮っていたよ」

「俺は…ゼロですよ。ゼロ」

某強化人間研究所の最初の男、もしくは反逆の人の名を名乗る。

「ゼロねえ…まるで偽名だねえ。相当やましいことがあるのかい？」

姐さんの眼が冷たい！

「さて、出発すよ〜！とりあえず目指せ3000撃破！」

「…」

まだ冷たいよ…

ちなみに何故3000というただ単にエルメラーダ級が欲しいだけである。

ロウズの時点でエルメラーダ級…ロマンです

まあネージリッドの最新鋭艦がいまの時点で入手可能かは知らない

けどね。

ゲームの中では確認済み。あれは面倒だったぜ。ストーリー無視  
してずっとロウズで名声稼いでたからなあ。まあおかげであの眼抉  
られるイベントでグランヘイムが自分の船の上のほうに止まるのが  
わかった。

いいのか悪いのか…

そんな訳で空間通商管理局でランキングを確認できるため、おそら  
くエルメラード級やバロンズイウス級が手に入る。高額でかさばっ  
て使いづらিদらうけど、モジュールも手に入るしな。

「あ。トスカさん。副官お願いしてもいいですか？いくら雇えたとい  
ってもトスカさんが一番信用できますし。」

「構わないよ。プーよりましだしね」

ちよ。それ別の人の台詞っ

ともかく、司令艦橋へとあがると職歴から信用できそうな連中…よ  
うはその筋のリーダーや専門家が集まっていた

まあ俺が艦橋要員で集めたんだけどね！

「艦長、聞いていたより若いわね。」

シアンさん、女性、24歳

元アナウンサーなのでメインオペレーターをしてもらってる

「でもいいんじゃない？美形よ？」

航海長

ヒメさん、女性、24歳

シアンさんの同級生で航路地図会社の社長していたらしい。

「よろしく頼むぜ！艦長！」

砲雷班長

ジランさん。男、28歳

ロウズ警備船の砲雷士してたらしい

「艦橋での挨拶は済ませたツスよ」

レーダー管制長

マドさん、20歳、男性

ジランさん同様元ロウズ警備船員

「インフラトンインヴァイターも最高潮だったよ。」

機関長

レインさん、69歳

実はかつてデラコンダがまだOGドッグしてる時の機関長だったらしい。

…大物かも

でも艦橋要員じゃないのに何故いるし

「俺らはまだ仕事ないから挨拶に来たぜ。艦長」  
整備長

タカギさん、男、30歳

元ロウズ警備船の整備士

「出航してからが仕事アルからね。」

シエフ

ワンさん、42歳

家族率いて参加の料亭の人

…つか心読んだ？

「ま。搬入作業も終わりですからもう出航しますよ。」

「了解。空間通商管理局に連絡いれます。」

船が動き出すためにその巨体を揺らす。

「よし、飛ベッ」

その一言を合図に俺たちは宇宙へと旅立った。

### 第三章 ロウズ終幕編（前書き）

お初ですね。前話はいかがでしたか？

さて今回はいきなりオリジナル艦がでます。乞うご期待！

### 第三章 ロウズ終幕編

ロウズ警備船船長 side

「『黒』 捕捉、砲雷士、目標標準！」

「今度こそ叩き落とすぞ！」

例え適うまいとて仕掛けざるを得ない。この職についた事を激しく後悔していた。

黒いアルク級を旗艦とした駆逐艦の艦隊がロウズ宙域に現れたのは2ヶ月前、最初は一隻だったが、今ではアルク級が二隻、ジュノー級が三隻と

増長されてしまっている。

しかし領主のデコランダには第一級最優先目標と言われているので見つけ次第攻撃せねばならない。

「くそっ！全弾回避された！」

「目標に熱量増大！攻撃来ます」

「総員退艦ー！」

やはり適わないか…

side out

ゼロ side

「よし、ナイス。砲雷班！」

「いつも通り原形は留めさせませ」

駆逐艦で精密射撃ってすげえわ。うちの砲雷班

原形留めさせたのはまた出てきてもらうためです。

これを宇宙港に持って行って売るんだが、売った中古品をまたロウズ警備船として買ってもらう。

んでまた奪うっていうループで生計立てている。

名声値ももらえるし。拿捕するのもうちくらいなのでおいしくいただけます。ちなみにアルク級一番艦とジュノー級一番艦以外は無人で、輸送船扱いだ。

アルク級二番艦は盾も兼用するし。

ジュノー級の指揮はトスカさん…ではなくなんとトーロである。

バツシヨで雇った人間の中にトーロがいたのは驚いたね。

何故かは知らん。

けど初対面だからなんとも言えなかった。

履歴によれば輸送船団率いていたから一隻任せた

トスカさんには副官として色々アドバイスもらわないとだしね。

「シアンさん、カウントは？」



「今のところ、2871隻ね。2ヶ月でこれは凄いいんじゃない?」  
1日で50隻くらいやったときもあったからな。

「一旦トトラスにもどろーか。ジュノーにも入電。」

「アイサー。キャプテン」

「そろそろランキング見に行こうか。」

エルメラード級欲しいんだよねえ。

バロンズイウス級って性能良いけど拡張性割と良くないから、長距離航行に向いてなさそうだし。居住性も考えないとだしな。

「しかし完全に海賊っスね。」

「いいんじゃない?相手はデラコンダだけだし」

ま。問題はいつチエルシーが出てくるかなんだよね。  
原作なら即イベント発生したのに…

もしかしたらチエルシー無しになってる?

「あ。ジュノー一番艦から入電。」

「ん?画面に出して、」

トーロの野郎: なんの用だろう?

『ういーッス』

「用件いえ。」

『つめてえな。俺とお前の仲だろ?』

「いやそんな仲になった記憶ないし」

ランキング早く見に行きたいんだけど…

『まあいいや』

よくないわい

『ニユース見てみるよ。デラコンダ本人が直接ゲート張るらしいぜ』

まじすかい?

「にゃにゃ?...シアンさん?」

「はい、今確認しました。専用艦使うみたいでゲートに向かって今朝出航したようです。」

確か大出力レーザー積んでるんだっけ…

うは、面倒…

くトトラス宇宙港

とりあえずランキング見に空間通商管理局いこうか。  
積んでいた荷物を五隻の艦から卸す間、メンバーにはみんな、お暇を与えた。

首ではなく休暇だよん。

「しかしよ。ランキング見に行くのはいいがそうかんたんにあがるのか？」

「いや今まで簡単じゃなかったからね？」

トーロと二人でランキングを見に窓口に行く。

トスカさん？あの人は酒場いったよ。

「いらっしやいませ！ランキング順位の確認ですね」

「うす」

他に何しにここにくるのよ。

「お客様のランキングは…なんと20位です！」

「…まじかよ」

啞然とするトーロ

いや狙ってたからね？

んで初確認だからな…

「…えつとこちらがランキング報酬になります！」

なんか大量に設計図キター！

大半はモジュールだな

「…バロンズイウスに…未完成の謎の設計図？」

見た目エルメラード級っぽいんだけど、若干形が違ってるというか…  
「翼なくね？」

「は？」

「え？」

なにいつてんだこいつ、みたいな顔で俺の顔みるドロイドとトーロ。  
なんか双胴艦みたいなシルエットではあるんだが、翼っぽいなし、  
翼っぽいのがあつた部分の甲板にLサイズのレーザー砲ついているん  
だよ。さらにSサイズの砲がMサイズにランクアップしてる

つまりL×3、M×3の超攻撃空母になってんのよ。

「なんなのよ。これ」

もう聞くしかあるまい。

「これはネージリッドで開発されていましたが、断念された空母で  
すね。単艦で戦艦と空母の役割を同時に行うためのものらしいです。」

…要はエルメラードの前身的なのか？

「…うし。これ黒く染めて作る。」

「…2000級か…小マゼランでは敵なしだな。」

グラン Heim といひ勝負できたらいいな。

ちなみにランキングみたらヴァランタインさんの名声値、一億突破してたね。さすがに原作とは違つか。

ちなみにロエングは22位、サマラさんは18位、グラッシュは55位だった。

その辺は原作とは違つかのね「そういえば、俺らってどんな感じに見られてるんだ？」

と、トーロ

俺も気になるな

「ロウズ警備船やデラコンダを崇拜する方々からは海賊として、宇宙に出たい方からは義賊のように見られてますね。ロウズ宙域では指名手配されてますが他の宙域ではランキングにいきなり上位にめり込んできた猛者のように見られてると思います。」

流石ドロイド、一息でいうとは…

「海賊か…」

「船から降りたくなつたか？トーロ」

物資の運搬に関してはプロ並みのトーロが抜けたら痛いからやめてほしくないがな…

「いんや？他の宙域いったら大した事にならないだろ？お前次第だけどぞ。」

「ま。他の宙域では海賊狙いたいとこだ。」

流石に軍に睨まれたらヤバいつつの

「じゃ、トーロ好きにしていませ。俺は空母作ってくる」

「おつよ」

俺はトーロと別れて造船所に向かった。

造船所ではアルク級やジュノー級、フランコ級が改修や製造されていた。

実はロウズ警備船が大量にやられたため、ロウズの法を無視したい反デラコンダの連中が宇宙に出まくっているからだ。とはいえゲートが閉鎖されているため、他の惑星間のみであるが…

…俺のせいかな？

まあいいや。

「いらつしゃいませー。」

「これ製造したいんだ。」

そういつてエルメラード(?)級の設計図をみせた

「こちらは宇宙初の開発ですので名前のほうをつけてもらえますか  
」?」

「やっぱり名前ないのか…」

エルメラードとつける訳には行かないからなあ…

…よし。

「ソロモン級双胴空母で！」

「了解ですー。」

もちろん亡霊とかいる某宇宙要塞から命名しました。ただ接近されたら弱いから早く本国いつてまともな軍用駆逐艦買わないとだな。

けどエルメツアならアーメスタ級だよなあ…

軍人にあつたら交渉してみるか。

そして俺はコンソールで船内のモジュールを配置していくのであった。

完成は明朝らしい。

足りない人材はドロイドいれないとな。

ちなみにドロイドってあれだ。オープニングムービーでコンソール叩いてたロボット。

人間の代わりにはなるけど、突発した能力ないからな。可能な限り人を雇いたい。

…それを終えたら寝よ

side out

翌日

S i d e i n

「  
…」  
「  
…」  
「  
…」  
「  
…」

「お。やっぱりでけえな！」

「感想ありがとうトーロ。君は心の友だ」

トーロ以外無言ってどーよ。これ。

まあグランヘイムよりでかい艦の前で普通よりでしたが。

「…なんだいこれ？」

トスカさんがようやく口を開いた。

「ソロモン級双胴空母。宇宙で俺しか持っていない超大型艦。我らが旗艦にして、新しい家だ！」

そう。そこにあるのはエルメラダに酷似してるが、翼はなく、通常の戦艦を超える砲塔を標準装備した漆黒の空母。

「ちなみに、スポーツジムに自然ドーム。シップシヨップ、大型浴槽完備、食堂も一流ホテル越えの設備、医務室も病院並みだ。見ての通り空母なので格納庫や整備室もでっかいぜ」  
ランキングでもらった。

「…う、うおおっ！」「…整備士、生活班、保安員を筆頭に歓声



があがる。

ちなみに科学班はいないのよ。

何故なら乗船希望の科学者がロウズ宙域にいないから。

「艦橋もアイルラーゼンのものだ。管制室の機器も最高のものを用意した！」

「……わああ！」

今度は全員から歓声があがる。「しかし金が尽きそうだ！」

「……」

今度は冷めた……だと……！

「故に、いまのままロウズ警備船を襲っては無意味だ！これより我が艦隊はゲートの敵を蹴散らし、エルメツァ本国を目指す！俺についてくるものは続け、去るものは去っても構わない。ただし一言言わせてくれ。今までありがとう！」  
そう言い終われば艦への入り口を開ける

「……わあああ！」

「私はついていくよ。これからは正式にクルーさ。」  
とトスカさん

「みんなはええな……」  
とトローロ

この二人以外みんな我先にとソロモン級へと入っていった。

早い。早いよ。

「あ。トーロ、当面は保安局長についてくれ、アルク級とジュノー級は全て前衛で前に出すから無人にした。」

「いいぜ。艦長職は肩がこるしな……」

「じゃ私等もいくよ」

気づけば俺たち以外いないし。

うちのクルーまじばねえ……

それからそれから

各部署に人員が行き届くまで一時間かかり、ようやく出発した。最初の1日こそゴタゴタしたが、1日半かけてポイドゲート前までやってきた。

「艦長！敵旗艦から通信です。」「受けてやりな。」

「了解。」

デラコンダのやつナンのようだ？

『君がゼロ君だね？さあロウズに戻りたまえ。今なら刑も軽くして

やるつ。』

偉そうな…

俺。偉そうな傲慢なの嫌いなんだよね。

「砲雷班、威嚇で敵旗艦の大型砲に主砲3つ発射」

「オーケイ！」

『なに！？』

ソロモン級からレーザーというべき3つの閃光が放たれる。

それはデラコンダの旗艦…

右側に大型砲をつけた超アンチシンメトリーな艦の大型砲に直撃し、爆散させた。

「帰りましたまえ？帰るべきはそっちだろ？てか避けるよ。そのための威嚇なんだからな」

堂々と通信で言ってるんだから回避行動取れよ…

『ちっ…ならば全勢力で相手してやるつ。』

「艦長？レーダーに感あり、ボイドゲートのからレベルカ級がくるツスよ。10機…いや20機！さらにジャンゴ級10機」

…よし。ならば戦争だ！

「アルク、ジユノーを前方へ出せ！砲雷班は敵射程外から迎撃！」

「了解！」

ソロモンからレーザーが何度も放たれる。

まあレベルカ級はアルク級の連装砲が直撃するだけで落ちるのでオバーキルになる。

あとでわかった事だがソロモン級は対艦の数値がバロンズイウス並だった。

空母としちゃあり得んよ…。もはやチートだね。

「レベルカ級、八隻大破！ジャンゴ級二隻が消滅！」

レベルカ級はなんとか回避してかすったようだが、大破か…でも直撃したジャンゴ級は消滅って…

「…ごめんなさい」

「いやなに謝ってるんだい!？」

いやだって消滅だよ!？

凶悪すぎでしょ!うちの艦!「いや残骸すら残らないのは…」

「宇宙に出ているんだ。ダークマターになるくらいは承知してるだろっさ」

「ならいいすけど…」

そして相手の射程外から撃ってるため攻撃が来ない。

しかもソロモンはその凶悪な主砲と副砲を撃ちまくっているわけで…

「…敵旗艦以外逃亡を始めました。」

「…だらうね…」

艦橋にいる人の心の内が一緒になった。

「敵艦隊に通達。ボイドゲート封鎖を解くのであれば攻撃をしない。ただし依然として敵対するのであればダークマターになっていただ

く。」

「了解です。」

わざわざ追撃する必要ないしな。案の定旗艦以外は逃げていく。

残るはデラコンダただ一隻！

『小僧：貴様あああ！』

うは。テラ怒ってる（笑）

「まあ落ち着け。砲雷班、目標あのデコランダ」

「ブツ！り、りようかいっ」

「かんちょ…それは…」

「あっはははは！」

決まった…てか皆のツボにはまった。

『ぐぬぬぬ！このままでは済まさんぞ！』

「っ…通信、切れました。」

「敵…旗艦、接近！」

笑いが止まらない件（笑）

こらえながら仕事してるよ皆

「さてまじめになろう。砲雷班、敵旗艦前方に集中砲火！アルク級やジュノー級からも撃たせる！」

「おう！」

デラコンダの船は最大戦速でなのか、かなりのスピードで迫ってくる

る。

流石に特攻はまずいぞ？

「主砲、副砲着弾、敵艦通常砲門開口！熱量増大！」

「させねえよ！今までこき使われた恨みだ！」

「兄貴やるツス！」

「おうよ！艦長、バーストリミッターの解除を！」

そついやジランとマドは元ロウズ警備船だもんな。恨みもあるのか。

「よし。許可する。そのかわりのこの一斉射撃で仕留めろ。」

「おうよ！」

恐らく回避軌道をとっていない相手だ。撃沈するだろう。

「バーストリミッター解除！全砲塔標準！はっしゃあああ！」

ソロモンから放たれるレーザー。

それはデラコンダの船に着弾し、大爆発を起こした。

「インフラトン反応拡散…撃沈です！」

「おっしゃあああ！これが俺の力だあああ！」

「兄貴流石ツス！」

ものすごく喜んでるジランとマド

だがジラン、それはお前の力じゃなく、俺のソロモンの力だ！

「さて、邪魔者は消えたねえ。ゲートに突っ込むとするかい！」

「いよいよロウズから出るんだな！」

そして期待にテンションあがる艦橋。他の部署も同じだろうな。

…だがしかし。

「いやまずは目の前のデブリ回収するよ。」

「え〜…」

「空気読んでよ艦長…」

俺の一言で落胆する皆

いや金になるし。なにより…

「マド、ゲート前で浮いてるのな〜んだ？」

「なにしてデラコンダの…あ！」

気づいたらしい。

そう、ゲート前で戦闘したためデブリを回収して撤去しないと通れないのだ。

死しても邪魔者か、デラコンダさんよ…

「わかったら早速作業にかかるよ。最低人数だけ残してあとはジュノー級とアルク級にいくよ。ソロモンでそのままいったら傷ついちまう」

「」「うい〜す…」「」

そんな訳で足止め食らうのだった。



### 第三章 ロウズ終幕編（後書き）

オリジナル艦ことソロモン級双胴空母が出ました。

流石にエルメラードを使うわけにはいかなかったので（苦笑）

性能としては原作のランキング報酬のグラン Heim 並みですね。

いきなりの妄想暴走です。

次回はさらなる暴走もあるかも…

## 第四章 ラッツィオ突入編（前書き）

ついに来ました。ラッツィオ編！

さてさてこれからどうなるか…えっっ期待！

## 第四章 ラッツイオ突入編

ゼロside in

「げ。」

デラコンダ艦隊残骸をジャンク品として回収に2日かかり…いや普通に考えたら早いんだが…ゲートに突入したんだが…

「…えつとシルエツト照合完了ツス。スカーバレル海賊団のガラーナ級2、ゼラーナ級1、オールドーネ級1、ジャンゴ級8ツス。全艦こちらに回航中、熱量増大ツスね」

いきなりスカーバレル海賊に遭遇…しかもこっちに尻向けた状態である。

「ついでにその先にボイエン級4隻、サウザン級1隻、アリアストア級4隻ツス」

「カラーリングからエルメツツア本国の正規軍だねえ。この辺じゃ珍しいよ。」

…こんなイベントなかったと思うんだけどさ

「ま、軍人に恩売るのも一興か、ジラン、スカーバレルにぶっ放せ！」

「オーライ！」

こっちにくる前に撃ち込む。

ソロモンのレーザーが火を吹く！

…なんか違うか？

「あ！オルドーネ級が避けたッス。完全回避ッス」

「回航中のあの状態でか！？」

ものすごい驚いてるジラン。

そりゃ驚くよな。

ロウズではほぼ百発百中だったんだから

「でもオルドーネ級以外は全てレーザーの余波で行動不能ッス」

「敵艦から通信。」

通信用の画面にオールバックの男が映る。

『てめえ…こつちの邪魔しやがって…次は容赦しねえぞ！』

「次があるとでもお「通信切断されました」

ちよっ！遮られた！

「しかも足早に離脱されたッス」

「にがしたああああ！？」

驚きすぎです。砲雷班

「今度はサウザーン級から入電です。」

今度は若干体格がいい軍人が写った

『こちらエルメツア中央政府軍、オムス・ウェル中佐だ。援護感

謝する。』

ふむ。それなりの態度で対応してやるか

「いえ。それよりも何故このような地点で戦闘を？」

『うむ。我々はスカーバレル海賊団を警戒してパトロールしていたのだが、たまたま輸送船団を襲う連中を見つけてな。』  
「なるほど。」

『うむ。今回の礼をしたい。後日ラッツィオ軍基地まで来てもらえるか？』

「構いませんよ。」

行っただけにアーメスタ交渉してやるか。

『ではまた会おう。』

「エルメツツア艦隊、ボイエソ級を伴って離脱していきます。」

「艦長どうします？ここからならまずポポスで荷を降ろすことをお勧めしますよ？」

と航海長、

「ならそのように。ついでにトラクタービームで行動不能の連中も引っ張っていこう。スカーバレルの連中に刃向かったらタンホイザにぶち込むって入電入れといて」

「了解です。」ソロモン級で引っ張りながらアルク級とジュノー級

で後方から監視する。

無人艦だからできる芸当だよな

んでポポス

ポポスの宇宙港に入ってすぐ、引いてきたスカーバレルの船を売った。

中の連中にはそのまま港で降ろした。

宇宙に放り出されるよりましだろう。

ついでにアルク級、ジュノー級、ソロモン級に積んでいたジャンク品も引き取ってもらった。

あとで精算してもらおう。

そしてポポスにて3日間休暇を取った俺たちは再び銀河へと旅立った

「とりあえずラッツイオ軍基地にいくしかないよなあ……」

「いちお、最短航路を見つけてあるわ。ポポスからラッツイオ経由でいくルートね。一旦ラッツイオに寄航する事をお勧めするわ。」

流石はうちの航海長ヒメさん！そこに痺れる憧れ（ry

「そいやラッツイオに確かギルドあるんだっけ？」

「そついやあつたね。誰か雇いたいのかい？」

俺の質問に真つ先にトスカさんが答えてくれた。  
確かトランプ隊がいたはずだが…

「そろそろ科学班と操舵士を雇いたいしさ。」

科学班は仕方ないとしても操舵士は欲しいな。重力下でバレルロー  
ルさせるくらいの実力の持ち主いたらいいな…。

「寄航する度に募集はしてみてるけど、まだまだ欲しい人材はある  
しね。優秀な人材ならいるに越したことはない」

「確かにねえ。」

そんなこんなでスカーバレル海賊団を撃破しつつラッツイオに寄航  
する。

今度はオルドーネ級が捕獲できたけどこいつを解体処理するのに五  
日かかるそうな。

つまりその間、ラッツイオで休暇である。

その間にトーロヤトスカさんを引き連れてギルドにやってきた。

「…うわあ。」

「袖がなげえな。」

なんか隅に子供いたし。

とりあえず窓口に行くのである。

「すみません。人材を雇いたいのですが…できれば傭兵とか科学者  
とか操舵士とか…」

「傭兵と操舵士でしたら三番ブースにトランプ隊の方々がおります。」

トランプ隊k t k r !  
さっそくいつてみた。

「…ほほう。あなたが」「若いじゃないか。大丈夫なのかい？」

いかついおっさんとおばさん…いったら殺されそ。  
ププロネンとガザンやね。

「ども。ゼロっていいます。是非あなた方を雇いたいんですよ。どうですかね？」

「ふむ…フェノメナ・ログを見せていただきたい。」

「おっけ。」

別に構わないのでログ…航海記録を見せる。  
これは全ての航路、交戦記録が自動記録されている。  
基本的にこれを目安にして品定めされるのだよ。

「…これはこれは」

「…半端ないな」

「で、乗ってくれる？」

ま、多分大丈夫だろ。

「あなたなら我々の命も預けられそうだ。私はププロネン、トランプ隊のリーダーをしています。」



「あたしはガザンだ。久々に腕がなるねえ！」

「お、交渉成立のようだねえ。」

「良かった良かった。じゃ俺はトランプ隊の方々を艦に案内するから、二人はどする？」

「俺は酒場いつてくるぜ」  
とトーロ

「お？なら飲み比べするかい？」  
とトスカさん。

「おっけ。出航までには帰るんだよ。あと4日あるから大丈夫だろうけど」

二人を見送り、乗艦のため荷をまとめていったトランプ隊を待つ間にギルドでさらなる人材発掘をした。

その結果、科学班数人とその筆頭のホロムさん。操舵士のアールドさん。

彼らを雇う事に成功した。彼らとトランプ隊を引き連れて宇宙港へとやってきた。

「ふむ…しかしどれが艦長のものでしょうか？」

ラッツイオの宇宙港には  
サウザーン級やオルドーネ級（解体処理中）、フランコ級、ボイエ  
ン級、アルク級があった。

「ま、オルドーネ級がそうだ。といっても過言じゃないけど」

そのまま1000級以下の船があるドッグから離れ、大型艦船ドッグに向かう。

…彼らの疑念の目線がキツイッス

つか大型艦船ドッグもうちのしか使っていないからアルク級やジユノ一級も一緒に入れてるけど。

「これが俺の旗艦にして君たちのこれからの家、ソロモン級双胴空母さあ！」

「「「…」」」

あれ？なんかデジャヴ

「…これはネージリンス…いやネージリッド系列の艦船ですね。空母という事は艦載機も？我々はパイロットですのであれば活躍できますが」

カラーリング変えてるのに見てわかるとか…プロネンさんパネエ！  
「その通りネージリッドのです。いや艦載機は現在ないから、入手できるまでは傭兵の皆さんには教官や訓練積んでもらう事になりそうかな。」

確かカルバライヤで入手できたっけ…

でもないよりマシ程度の性能しかないからな…

「ふむ…わかりました。」

「納得していただけて助かるよ。当面は保安局所属だから治安守っ

てね。」

「了解だ。あたしらは白兵もこなせるからね！」

「「おー！」」

歓声があがるトランプ隊

「操舵士のアールドさんとホロムさん方は艦橋いつて挨拶。その後研究室に案内するよ。さてここにだしたります端末がうちの乗員の証ですので無くさないように。」

そついいながらスマートフォンぽい端末を渡す。

実はこれ、スマートフォンとかにもものすごく近いのに性能が隣の惑星ですらつながるほど高性能。

艦内では財布や身分証の役割もしてアプリも入っている。しかも艦内地図完備で改修の度に自動更新である。

マジパネエ…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2763z/>

---

無限暴走航路

2011年12月17日10時50分発行